

「ハンディキャップトイ」のこと

——福祉の中に教育の原点を探る——

公益財団法人育てる会 会長 青木 孝安

かつて私は、T社という玩具会社の、玩具開発に関する調査助言を行う仕事を行っていた。育てる会の初期の頃の「家庭教育研究所」という時代のことである。

幼児を持つ家族の、「おもちゃの購入動向の調査」という課題の元、数人の母親たちの協力を得て、デパートの玩具売り場に立ち、おもちゃの購入の様子を観察記録して企業に報告した。

また、団地内の遊園地における、幼児の砂遊びや、遊具の遊びの様子を観察記録して、その実態を報告した。

開発途中のおもちゃを、子供たちの遊び場に持ち込み、遊びの様子を観察して、そのおもちゃの改良点を助言した。

多くの試作品の調査を行ったが、とりわけ「スペースジャイロ」という、電動で動く

コマについて、試し遊びの観察結果からその理学的教育性を解説した推薦の文章を作成してT社に提出、T社はこの文案を元に数万枚のパンフレットを作成して、全国のおもちゃ売り場で配布した。

T社のブラレールについては、その遊びを長期的に観察して、改良点を助言した。

大きな事業としては、当時の玩具六社会の後援で、『玩具、遊具に寄せる願い』と題して、全国的に論文募集を行ったことである。

多くの論文が寄せられ、一等入賞者は、点字による盲人の論文と記憶している。

当時、T社には、玩具開発に情熱を傾けている社員が大勢いた。特に、子供の遊びを大切に、経済効果ばかりでなく、真に子供の成長に役立つ玩具の開発に真摯^{しんしん}に向き合っている開発者たちには頭がさがる思いがした。

とりわけ、Iという常務理事とは格別に懇談する機会が多かった。

I理事とは、「究極の、玩具、おもちゃとの原点はどこにあるのか」ということについて語り合った。

ある日のこと、I氏との懇談の中で、I氏の口から、「ハンディキャップトイ」という言葉を聞いた。ハンディキャップトイとは、障害を持つ子供のためのおもちゃのことであると言う。

I氏が語るには、「ハンディキャップトイ」の中に、玩具の原点があるのではないかと言うのである。

健全児を対象にした活動を眼中においてきた私にとって、この考えは驚きであった。それは福祉の分野の仕事ではないかと思った。しかし、遊びという観点では、教育の分野にも当てはまるのではないかとも思った。

しかし、当時のこと、育てる会は、子供たちの自然体験活動に力を入れるようになり、多忙な日々が続いたことや、T社の機構改革などと重なり、不本意ながら玩具の世界から遠ざかるを得なかった。

しかし、その後も、「ハンディキャップトイ」なる言葉が、いつまでも私の脳裏の片隅に住み着き今日に至った。

近頃のこと、私は仕事の合間のひと時、遠い過去の記憶を思い出し、何気なく、インターネットで、「ハンディキャップトイ」のキーワードを検索してみた。

なんとそこには、「ハンディキャップトイ」のことが詳しく書かれているのだ。私は夢中になって記事内容を読み続けた。

その概要を書こう。

1980年、T社は、誰でもが楽しめる玩具作り、という社是の元、障害のある子供のための玩具作りのための、「ハンディキャップ研究室」を立ち上げた。

研究員たちは、障害者の施設をめぐり、現場の声をきき、目の見えない子供が遊ぶ時のための、メロディーボールを作った。

これが業界に大きな反響を呼び、日本玩具協会の元、一般の玩具にもこの配慮を施すこととなった。障害のある子供も普通の子供も共に遊べる玩具作り、つまり「共遊玩具」という考えを採用することとなった。その結果、現在、日本玩具協会認定の「盲導犬マーク」は目の不自由な子供の遊びに配慮した玩具の印であり、「うさぎマーク」は耳の不自由な子供の遊びに配慮した玩具の印となっている。

T社は、現在T・Tとなったが、この実績を評価されて、内閣府から大臣賞をもらったとのこと。これからは、「共遊」という理念のもと、様々な個性の子供や高齢者をも交えた共に遊べる玩具の開発を目指して研究を進めるとのことである。

玩具を通して遊びの原点を、福祉分野の遊びの中に求めた、一企業人の姿勢に、私は大きな感銘と示唆を得た。

育てる会は事業の発展に伴って、多様な社会の期待にこたえていかななくてはならない。その多様な期待に応えるためには、目立たない仕事ではあるが、社会教育の原点の掘り下げが必要と思う。それは、さながら、農業の基本は土作りにあるの喩えのごとくである。その思いを携えて、私の足は、横浜の児童養護施設に向かったのである。

その結果が本号の、西野勉養護施設指導員の記事掲載となった。

私の訪問、学習結果も、折をみて掲載したい。